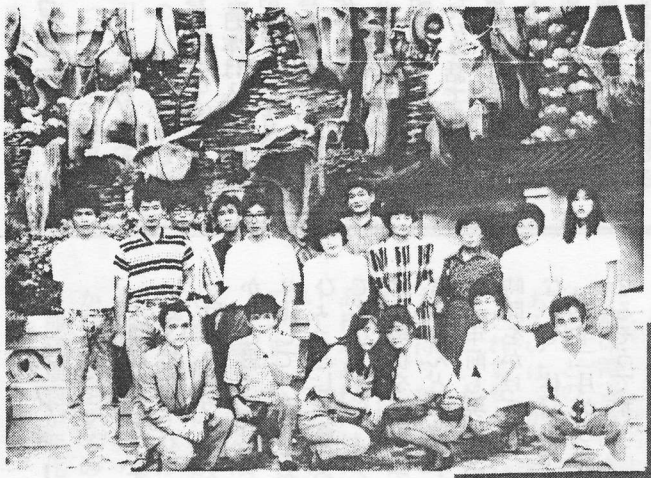
MORLIN 社内報

波紋

第 40 号

1988 10

香港・マカオ 社員研修旅行



交差点

世界の孤児・日本

香港・マカオ旅行で、現地日本人ガイド氏が話してくれた事が大変印象的でした。

日本人は、自分達を先進国だと思っているかも知れないが（欧米の人々と友達）欧米の人々は仲間だと思っていない、考え方や文化の面で。

又、アジアの国々の人からも「友達」と思われていないのが現実です。今回の旅では、そのあたりのギャップを痛感した。

国内に居て、頭の中だけで、色々判断しては、大きな間違いに気が付かない。旅の良さは、こんな所にもあるのでしょう。

※同じ一つのことです。

愛情ふかい方の描いたその事柄は、日常生活のやさしい姿にみえました。

憎しみの強い方の描いたその事柄は、かなしい悲壮なものにみえました。

同じ一つのことでも視点のおき方によって全々別物に見えます。どちらが正しいとかでなく、皆が物事を明るく、素直に考える、会社・社会になれると、すばらしい。

視点を上げて、おもしろく、たのしく人生を送りましょう。今の世、かんちがいが多すぎる。と思いませんか？

森　信之

トシ君の一方通行

木村　英利

アメリカは大学へ入るのは簡単で、卒業するのが大変であるそうです。日本は入るのがむづかしく、卒業するのは割と卒業できるそうであります。もっとも私は大学へ行っておりませんので、そうじゃなかったら申し訳ありません。

以前にちょろっと聞いた話でありますが、裏口入学を見直してみようという話であります。つまり優秀な先生を高級優遇でしっかり集める訳であります。ほいでもって全国からおもいっきり金持ちの子供を「表口入学」で集めます。成績の悪い学生順に表口入学金を集めます。年間授業料そうですね一億円位。しかし世の中にはお金持ちが多いから、それでもこの学校にしっかり魅力があるようにしておくんです。そして、授業は徹底的に体を鍛えるだけにするんです。（特に団体競技）もちろん全寮制でありまして、夜は小中学校の授業です。

さて「裏口入学」ですが、とびっきり優秀であるが、経済的に恵まれない青年を「裏口」から内緒で入れてやるんです。「ええか、内緒で入れてやる、優秀な先生もつきっきりだ、海外も研修に行かせてやる。そのかわり卒業したら世の為人の為、尽くせよ！金は一銭も要らん！」こういう大学ができんかなあ。

『フォーシーズン』

稲葉　友昭

人間は慣れるとすぐにマンネリ化に陥ってしまいます。

自分のやっている仕事を考えてみても、良かれと思っていることでも固定化し、マンネリ化していることが多くあります。ひょっとして違うやり方でやってみたら今までよりうまく、早くできるかもしれません。常に現状を否定して、他にいい方法がないか考えどんどん改善していきましょう。

一年前も現状も同じ仕事を同じ人数で同じ時間をかけてやっていたのでは給料はあがらないし、休日も増えません。

来年二月から金融機関は完全週休二日制になるそうです。当社も、月二回くらいは土曜休みにしたいものです。

当社の社長は話のわかる社長だからきっと近いうちそうなるんじゃないかな……ただし、いろんな意味でどんどん改善が進んだらの話しです。皆んなで協力してがんばりましょう。

マコのものしりコーナー

老酒と紹興酒

中国料理店で「老酒」と注文して出てくるのはコハク色をした醸造酒。口あたりがよく油っこい中華料理によく合います。

ところで、やはり中国料理店で「紹興酒」というラベルのはられたお酒を見かけますが色、香り、味とも老酒と変りないようです。この二つはどう違うのでしょうか。

実は老酒は中国の譲造酒のなかで長年貯蔵された逸品を指す言葉です。古い酒なので、「老」の字を冠します。「特級酒」や「ナポレオン」などと同じような意味の呼称です。

中国には各地にいろいろな銘柄の酒があります。これらをひっくるめて、その中の品質のすぐれたものを「老酒」と呼ぶわけです。

一方、紹興酒というのは紹興でとれた酒という意味です。中国の酒どころのなかで最も有名なのが浙江省紹興というところです。ここの酒は特に美味なことと知られ、「紹興酒」と呼ばれています。紹興酒は中国にたくさんある老酒のなかの代表的な銘柄というわけです。

夏休み読書感想文

「消費税」　北野弘久著者
「いまなぜ税制改革か」　労働教育センター編

安井　浩二

自民党の税制改革案

一方で直接税の減税、他方で大型間接税である「消費税」の導入。

この税制改革が行われると、我々の国民の生活や企業にどの様な影響が出るか？

所得税等の直接税の減税内容は、高額所得者ほどトクをする減税で、めざましい減税となるのは年収二千万円を超える層から始まるぐらいで、わが国の給与所得者の分布からみると、年収六百万円以下で全体の約八十五％、年収二千万円超の人になれば、その少数点以下の割合のため、減税がおこなわれたとしても、消費税が導入されれば三％の税率でも勤労国民のほとんどが増税ということになる。

その「消費税」は、すべての支出に一律で、三％の課税をするために、物価が全体として上昇し、生活必需品については便乗値上げの恐れがあり、また独占価格である公共料金はおそらく過大な便乗値上げとなる。

又、中小企業などへの影響では、他に税の負担を転嫁させることができず、しかも三％の税率では採算があわないのはあきらかなため、今後二ケタ台の税率が引き上げられる事が予想されており、そうなった場合、業界へは大きなダメージをうけ、倒産、廃業に追い込まれ、失業者の増大、日本経済の活性化の喪失等にもつながっていく。

なぜこの様な消費税が導入されるのか？

日本の経済構造はすでに「戦時体制」にはいっており、ぼう大な軍事産業を維持するために税金をとり込んで、租税体系の再編成にしておく必要があるわけで、この様な〝見えない戦争〟のために、私たち多数の勤労国民生活をおびやかす税制改革、「消費税」の導入を許してはならないと考えさせられました。

「1リットルの涙」　木藤亜也著

亀井　敏代

身体障害者の人が街を歩いているだけで、ほとんどの人は白い目で見ることでしょう。あるいは〝かわいそうに〟と思う人がいるかもしれません。しかしそれは、上辺だけではないでしょうか。〝私には関係がない〟という気持ちが、どこかに少しはあると思うのです。私も高校一年生になるまではそうでした。高校が高校だけに少しは考え方が変わったということです。いろいろな障害者達を見てきていますから…。

木藤亜也さんは、突然「脊髄小脳変性症」という病気にかかってしまったそうです。この病気というのは…神経細胞グループのうち反射的に身体のバランスをとり、素速い滑らかな運動をするのに必要な小脳・脳幹・脊髄の神経細胞が変化し、ついに消えてしまう病気…だそうです。とても難しい病名でよくわかりませんが、突然というのは怖いと思います。健康な身体から訳の分からない病気にかかってしまうのですから。私がもしも、この「脊髄小脳変性症」にかかったとしたら、すごく落ちこむでしょう。生きる自信を失ってしまうでしょう。しかし、亜也さんは違います。生きる希望を持ち、難病と闘い続けました。私は素直にすごいなぁと思いました。

ニュースや新聞で「身体障害者の人が…」といろんなことにチャレンジしているのを耳にします。何か一つやるにしても…とにかく何もかもが一生懸命なのです。自分自身が情けなくなります。とても恥かしいです。何のために19年間生きてきたのか、ふと考えても何も思い浮んできません。一つでも一生懸命にやったことがないのかもしれません。いや、多分ないでしょう。人間は努力しなければ生きて行けないと頭の中では思っているのですが、実際、行動にでないのです。今の自分、何の目標もありません。ただとにかく仕事を、という感じなのです。こんなことでは亜也さん、そして、生きたくても生きられない人達に申し訳ないと思いました。

この本を読んで、生きていることの大切さ家族そして皆さんの心のあたたかさや優しさ言葉にはならないいろいろな事を教えてくれました。いろいろな事を考えさせられました。今からでも遅くはない。今の自分をみつめなおして、精一杯生きて行き、何事にも一生懸命に努力して行きたいと思います。

亜也さんのめい福を祈りたいと思います。

今月の社内行事

十月

一日　業務連絡会議
　午後一時より

三日　経営会議
　午前七時半より

八日　第二土曜日　休日

十日　体育の日　休日

十一日　幹部会議
　午前七時半より

十七日　幹部会議
　午前七時半より

二十一日　Y・M・S
　午前七時半より

二十三日　中高ビソフトボール大会
　於（庄内川緑地グランド）

二十四日　幹部会議
　午前七時半より

二十七日　中堅幹部会議
　午前七時半より

二十九日　F・M・S
　午前七時半より

三十一日　幹部会議
　午前七時半より

我が家の事件簿
＝親の役目＝

「期待をしたらダメよ、あとでショックが大きいから」―近所の奥さんが高校生の息子さんの愚痴をこぼしてみえた時の言葉です。言う事を聞かない、口きけば反抗する言葉ばかり…等々。女親としては限界がある事をしきりに言われる。我が家にも同年代の子供がいるので、他人事ではないような気がしたのですが「誰でもこんな時期があるものよ」としか言えませんでした。

この日の夕食では、この話題を中心に、三人の子供といろいろ話しました。その中で「その点、うちは皆、素直に育ってよかったわ」と言った処、息子が「何も言わないから、素直に育ってると思ったら違うよ」と言う。更に「つまらない事でガタガタ言った処、お互い気分が悪くなるだけだから言わないんだよ」と。ドキッとしている私の横から、高三の娘も、「そうなのよね」とポツリ。今迄やんちゃな末娘に比べると、上の子達は大した心配もさせられず、順調に育ってると自負していた私にはいささかショックでした。親への不平不満を感じる年頃も分るのですが、覚めた感じであのような事を言われると、心穏やかではありません。だから、私が不安気な顔をしていたのでしょう。「何を深刻な顔してるの？大丈夫だよ」と、学校の話、今日の出来事を話しながら、いつもの食事の光景です。ホッと胸をなでおろす思いでしたが、親の役目を改めて考える一日の終りでした。

岡田　洋子

今月のことば

願を持ちましょう

「願」と「欲望」とは根本的に違います。
わずかなお賽銭をあげて、
それも年一回の初詣の時くらいで、
「家内安全、商売繁昌、お金がいっぱいできますように」――なんてね。
こういうのは個人的、私的な欲望です。
それをわたしは否定しません。
わたしも同じですから。
しかし、そういう私中心の欲望とはまったく別に
○核戦争など　絶対に起こりませんように――
○世の中が　どうか平和でありますように――
○山や海や河、
そして土、水、空気、自然が
人間の作る公害で、
これ以上汚れませんように――

願

と、心から念じたとき、
それを「願」といいます。
どんな小さな「願」でも
心ひそかに持ちつづけていると、
顔がよくなり、眼の色が
深く澄んできます。
ひとりひとり自分に合った
「願」を持ちましょう＝
そして「一隅を照らす」人間に
なりたいものです。

昭和六十年　秋　彼岸の中日
合掌　相田みつを

●編集後記

ジンと身体にしみわたった秋風。コオロギの鳴き声。長い夏が終り、もう秋があちこちで顔を出します。こんなに明るい昼間なのに秋はなぜか淋しさを感じさせます。もくせいの香りが、窓から流れこみ。銀杏の葉も黄金色になって。

ところで皆さん〝秋〟食欲の秋、スポーツの秋、読書の秋、いろいろありますが、皆さんは何の秋でしょうか？

先月号から編集部員に加わり、より一層フレッシュな話題、情報を皆さんに、お届けできるよう頑張りたいと思っています。

今村　千草

編集発行者
森松株式会社
発行責任者
橋本正子
昭和63年10月1日
第40号